

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要

論 文 題 目

地域の日本語教室はどうあるべきか

—あるボランティアの教室活動観からの考察—

小島 佳子

2009年3月

第1章 序論

筆者は日本語学校で、能力試験のため、大学進学のための日本語教育に関わるうちに「日本語教育」を自分自身に問い直すようになった。その答えを求めて、地域の日本語教室に参加したように思う。また、筆者自身、生まれ育ったわけでもない在住地域との希薄な関係性に不全感を持ち「地域と結ばれたい」「自分なりの場所にしたい」「ここに住む理由・住んでいる実感がほしい」との想いもあったのかもしれない。だからこそ筆者は地域の教室の外国人住人ともボランティアとも人間的な関係性を結びたいと思っているのである。

しかし、地域の教室に参加してすぐに1人のボランティアが辞め、その後も次々と辞めていき、2年9か月の間に16人ボランティアが教室を去っていった。その背景には、ボランティア同士の、そしてボランティアと行政との間の見えない意識のずれのようなものがあるように筆者には思えた。そして、そうしたボランティアが共生できない教室状況の中で学習者もまた来なくなっていくのである。このような中で教室を人々が去らない場にするために、まずはボランティアの協働のありかたを探ることが必要なのではないかと考え、ボランティア相互の協働に向けた本研究を志したといえるだろう。

地域日本語教育に関する先行研究は、田中（1996）、古川（1996）、森本（2001）のように、地域の教室の課題を鋭く提示し、教室に関わるものにとっても多くの示唆を与えている。しかし先行研究では、森本（2001）のように、教室のほんの一部分の分析で終わりそこで営まれている人々のかかわりあいを丸ごと捉えようとせず、そこには教室の人々が何を喜びとし、何に困難を感じ、何を考えながら生きているのかということは明らかにされていない研究がほとんどである。

また、小澤（2002）によれば、地域日本語教育は参加する人々の多様性からボランティアが他のボランティア・日本語教育専門家・行政との間で「溝」を感じている現状があり、その原因は個々の教室活動観の違いによるという。この「活動観」とは、それぞれの人生経験から生まれた価値観に根ざしているものであり、相手の「活動観」を本当に理解していくためには、活動観の後ろにある経験や価値観までも含めて理解する必要があると考えている。この活動観を真に理解するということは、単に分かり合うというのではなく、「相手の活動観を自分の経験の中に落として理解し、相手の考え方と交わり自らを更新させていこうとする行為」である。本研究では、その1つの試みを提示し、ボランティア同士の協働を目指すための研究である。そのため、本研究の目的は、以下の2つである。

①ボランティアがどのような人生経験や価値観、経験的思想に根ざした活動観を持ってい

るのかを、教室の活動やそこにかかわる人々の関係性の中の、丸ごとの文脈で理解しようとする試みをする。そして、それがボランティア相互の協働へつながる可能性があるのかどうかを明らかにする。

- ②相手の教室活動全体とそれを支える活動観を自分の経験を通して理解することで、自分の活動観とどのようにつながっていくのかを明らかにする。

そして、本研究の意義は、以下の2つである。

- ①ボランティア同士の、ひいては日本語教育に関わる者同士が協働へ向かうための可能性を示唆する。
- ②あるボランティアによる、日本語教育以外の視点からの1つの日本語教育観ともいえるべき活動観を提示し、地域日本語教育による豊かな日本語教育の可能性を示唆する。

第2章 先行研究

近年「多文化共生」という言葉を至る所で耳にする。社会一般での使われ方は、違う国籍、文化を持つ人々が共に生きるということなのだが、ハタノ（2006）は『「多文化共生」という言葉はマイノリティ、または社会的に弱い立場に置かれている人たちの側から発生した言葉ではない。（p55）」と述べ、在留資格の問題や外国人住民の子どもの権利の問題を取り上げ、これらの問題を放置しておいて「多文化共生」を唱えるのは欺瞞以外の何ものでもないと痛烈に批判している。確かに、取り上げられている多くの場合は、日本社会側の不都合により発生した問題を解決するための場合が多く、逆に外国人住民の権利条項に関する問題は、日本人側の当事者性が薄く、関心が低いと言わざるを得ない。このような日本側の都合のいい態度が、「多文化共生」を欺瞞的スローガンにしてしまったのではないだろうか。このような欺瞞的現状を打破するためには、日本人住民が外国人住民を他人事ではなく我がこととして捉える態度を養うことであり、そのためにも課題提起型を例とする「社会教育」としての地域日本語教育は、その示唆を与えられるのではないだろうか。

山田（1997）は、「外国人等に対する支援の場が、支援する日本人ボランティア側の学習の場」となり、『互いに「相手から」学び、「相手とともに」学び、人として対等な関係を築く努力をする必要がある』と述べ、「地域社会における外国人等に対する支援の場は、まさに日本人と外国人等とが、地域社会の外国人等の問題を通して、ともに『社会教育』を実践する場として機能することが必要」で、「そのことは、日本という国家にある問題、ま

た日本と他の国家との間にある問題、さらには、地球規模での問題や、人間の問題をともに学びながら、その解決のために、ともに社会活動を続けるというものだと考える(p114)」と述べている。つまり、地域の日本語教室は日本語非母語話者のためだけではなく、日本語母語話者の学びの場でもあり、外国人住民の置かれた状況を我がこととして受け止め、日本社会を考え直す機会にもなり得るといのである。日本語母語話者と非母語話者が同じ地域に住む住民として出会い、互いに「相手から」学び、「相手とともに」学び、学びあう中で人として対等な関係を築く相互社会教育である。もちろん、その先に「人間の問題をともに学びながら、その解決のために、ともに社会活動を続ける」という目的もあるが、ともに学びあう過程も重要視にされている。現在の地域日本語教室の現状を考えると、まずはこの「ともに学びあう」ことを主目的にし、その学びをどうとらえるのか、そこにどんな意味を見出すのかということに注目して、地域の日本語教育を考えていくことが、期待されている。

また、この「社会教育」としての日本語教育とは全く別の提案もある。それは、田中(1996)の「教えない日本語教育」である。これは、外国人住民を常に教えられる側、ケアされる側に固定化してしまう従来の日本語教育は、日本語を「抑圧者の言語」にしてしまっているとし、言語に依存しない「コミュニケーションスペース」¹を提唱し、「外国人学習者に、偏った力関係のない、相互学習的な環境のなかで豊富で多様な日本語に触れることができる場を提供する(p33)」日本語を教えない日本語教育」が地域社会の日本語教育には必要であると述べている。

しかし、これらの先行研究で提唱されているような地域日本語教育は現実には地域の日本語教室ではほとんど行われていない。教室を担うボランティアにはそれぞれの「教室活動観」があるからである。それは、個々のボランティアのこれまでの生活、人生経験などによって形づくられ支えられており、逆にいえば、これまでの経験がもとになって地域の日本語教室でどのように活動するかというボランティアの信念や「活動観」が生み出されているのではないだろうかと筆者は考えている。

森本(2001)は、ボランティア同士の活動後のミーティングの音声データを分析し、その中でボランティアが自分たちや外国人住民を「先生-生徒」「日本人-外国人」にカテゴ

¹ 田中(1996)は、アメリカの黒人女性によるパッチワーク・キルト作りなどを例に挙げ、「いろいろなかたちの作業などを行う、活動中心の場」であり、自然な形で日本語が使われ、作業についてはむしろ外国人住民側が教える立場に立つことになる」と説明している。

リー化しているため「教える－教えられる」関係性となっていることを指摘しているが、森本はこの教室にこの時初めて参加しており、教室全体の文脈や「ボランティア - 外国人住民」間の関係性が見えている中で調査研究していたとは言いがたい。にもかかわらず、1度限りの会話でその中で起きている関係性の権力構造を判断することができるのだろうか。

筆者は、地域の教室が「教える－教えられる」関係性でもいいと思っているわけではない。しかし、相手との関係性の中で抑圧構造には意識的でありたいと願っている。しかし、専門家による研究は、教室全体を記述するには、あまりにも少ない情報の中で、(あるいは、貧しいデータ提示の中で) 問題点を抽出するための研究になっているように思えてならない。特に、ボランティアはその格好の対象となってしまうのではないだろうか。

第3章 調査概要

本調査は、ここで筆者が活動している在住地域のいちょう教室におけるボランティア仲間や学習者とのかかわり合いを通して掴みとってきたことを筆者の内省も含めて記録していく。またボランティア仲間へのインタビューによりボランティアが自分自身の生きてきた人生経験の中からどのように教室活動観を作り上げているのか、また、自分の外にある理念等をどのように自分の教室活動観へつなげていっているのかを明らかにしたいと考えた。そして「私」と同じYグループを曜日違いで担当しているボランティアのマルメロさん(仮名)の活動観を明らかにし理解したいと考えた。なぜなら、マルメロさんの活動実践が同じグループを担当している「私」ともつながっていたため、ペアのボランティアの活動観を理解することが、Yグループ全体の教室活動をより充実したものにすると考えたからである。また、Ⅲ期の終わりに、マルメロさん担当の学習グループ活動に継続的に参加し、筆者自身が知っている教室活動とはずいぶん違う印象を受け、その活動のあり方に深い興味を覚えていたからでもある。

第4章 分析と考察

インタビューでは、マルメロさんが身近に尊敬する教師像を見て育った経験から地域日本語教室での自分なりの在り方を探そうとしており、これまでの経験から教室活動観が大きな影響を受けていることが明らかになった。そして、マルメロさんの活動観ともいえる「地域の教室ですること」をインタビューの中から抽出して再構成しなおすと、①「心の窓が開く／かぎが開く」「関係づくり」「居場所」②「日本語のやりとり」③日本語の勉強

(文型文法で整理) という順番で挙げられている。そして、マルメロさんは特に①を重要視しており、③は①②よりも優先順位は低いという。そして、こうした自分自身の考え方を「福祉のワーカーをしていた経験からきている」と自己分析し、やはり、教室活動観がこれまでの経験に大きく影響を受けていることが明らかになった。

第5章 終章

本調査の結果、分かったことは以下のとおりである。

①ボランティアに地域の日本語教室で大切にすることをインタビューし、その中で、ボランティアは、自分の生き立ちや、人生の中で出会った人の影響や、自分自身が長年関わった仕事などの人生経験から価値観を作りだし、それが教室活動観となり、活動実践へと向かっていることがわかった。そしてその価値観から、自分なりの活動実践を工夫して実現していることも分かってきた。

また、その自分の人生経験に根付いた活動観は人生経験を通しているからこそ強固なものであり、それは簡単には揺るがないことも分かった。そしてそうしたボランティアに対して、専門家や他のボランティアが別の理念や活動観を提示しても、ボランティア自身の経験とは違うため、それらを頭で理解しても、本当に納得して自身の活動に取り入れることは難しいこともわかった。

②そのため、ボランティア自身が他の教室活動観や理念を、表面的にではなく理解するためには、本調査で行った包括的インタビュー調査のような方法が有効であるとわかった。それは、活動観を聞くだけでなく相手の活動を見学することでもなく、相手と活動観を通して対話していきながら、合わせて相手の活動観が具現化した活動実践に、傍観者としてではなく参加者として活動に参加し、相手の「人生経験 - 価値観 - 活動観 - 活動実践」の一連の流れの中で、経験的に丸ごと理解していくことが必要であり、そうすることで、相手がなぜこの活動をやっているのかが理解できるということが分かった。

ボランティアの教室活動観は、ボランティア自身の様々な体験やくぐりぬけてきた人生から築かれた価値観がその土台となり、教室に参加する人々と真摯に向き合い関わり合う活動を通して生まれ、更新されていき、そこからボランティアはさらに自分なりの活動実践に向かってゆくのである。だから、スローガンとして語られる「多文化共生」とその方法論が、個々のボランティアの生活や体験や経験とは切り離されたところで切り離された形で語られたままでは、個々のボランティアの活動とはなかなか交差し得ない。また逆の

視点からいえば、活動観とは、自分の経験から切り離して理解するものではなく、自らの経験を通して実感を伴いながら掴みとっていくものであるから、それは個々に異なっていて当然であり、決して外から与えられたり、統一されたりするべきものではない。

「地域日本語教育」とは、あるべき場もあるべきやり方もあるべき姿もはじめから存在しているわけではなく、「<いま - ここで - 私が - あなたと>同じ仲間として真摯に向き合い関わり合おうとしながら協働して作っていかうとする、そうした考え方」なのであり、この「地域日本語教育」という考え方は、地域の日本語教室だけではなく、日本語学校でも、大学でも、海外でも、そして日本語教育以外の場所でも、相手と真摯に向き合おうとするのなら、どこでも誰でも誰に対してでも応用可能な考え方なのではないだろうか。

【参考文献】

田中望（1996）「地域社会における日本語教育」鎌田修・山内博之編『日本語教育・異文化間コミュニケーション教室・ホームステイ・地域を結ぶものー』（財）北海道国際交流センター pp.23 - 40

古川ちかし他（1996）「地域における日本語学習支援の一側面」 『日本語学』
Vol.15(第 15 巻第 2 号) 明治書院

森本郁代（2001）「第 7 章 地域日本語教育の批判的再検討-ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」野呂香代子・山下仁編『「正しさ」への問い 批判的社会言語学の試み』 pp. 215-247 三元社

小澤伊久美（2005）「日本語教師が直面する多様な「溝」を乗り越えるー「溝」に関するアンケートの結果報告」『第 13 回小出記念日本語教育研究会論文集』 13 pp.60-81

リリアン・テルミ・ハタノ（2006）「第 3 章 在日ブラジル人を取り巻く『多文化共生』の諸問題」植田晃次・山下仁編『「共生」の内実』 pp.55 - 80 三元社

山田泉（1997）「地域社会における「日本語学習支援」の意味」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』創刊号 pp.113-119 大阪大学留学生センター